

2024 年度前期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	理学部化学科 2 年
(1) START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか	
<p>私は、START プログラムの参加を経て、大きく分けて二つの学びを得た。まず一つはバスクに関することである。私がこのプログラムに参加したのは、英会話の能力を向上させたいこと、そして昨年度スペイン語を履修していたため少しでも生かせれば、というのが主な理由であり、バスクにはほぼ馴染みがなかった。しかし、現地の講義において、バスク人がフランコ政権下により迫害を受け、ディアスポラが増加するなどの背景を持っていること、そして現在では物理科学や医生物、工学技術等の多様な分野の R&D において成長が著しいことを学んだ。過去を乗り越えた後、教育制度や研究環境、バスクのアイデンティティの保持とスペインとの調和のバランスを自国なりに整えてきたこのバスクの歴史が、私にとって非常に興味深く感じた。加えて、私は、バスクと日本には共通点があると考え。それは、バスクはゲルニカが無差別爆撃を受けた歴史、日本は広島と長崎に原爆が投下された歴史を持つ点である。ゲルニカ博物館を訪れた際に、実際に破壊された建物の瓦礫を見たり、爆撃当日の様子を追体験できる部屋に入ったりしたが、その悲惨さを改めて実感させられた。両者が爆撃を受けた経緯は異なるが、後世に平和の大切さを説く使命を持ち、同じ「平和」を追求しているのだということを学んだ。</p> <p>もう一つは、他者との関わり的重要性である。このプログラムにおける他者との関わりには二種類あると考える。まず、日本人学生との関わりである。大学は一見開放的に見えるが、実は自分から行動を起こさないと人間関係は閉鎖的になり得る。そのような中、このプログラムに参加し、学年、学部、育ってきた背景の違う多くの学生と日常的に関わることができ、非常に刺激的で貴重な経験となった。学生との関わりを通して、私の知らなかった大学のプログラムを知ったり、やりたいことを見つけて海外の大学院に進学するという新たな選択肢が増えたりしたことは大きな学びである。もう一つは、現地の方との関わりである。今回のプログラムでは現地の方と必然的に関わる機会が少なかった為、自ら関わる機会を探すことを心掛けた。例えば、講義の後に質問をしたり、現地の店で商品について尋ねたりすることである。その会話を通じて、実際の会話の場面で使われる英語表現を学び、自ら英語で積極的に伝えようとする力が身についたと考える。</p> <p>今後、学部生のうちに長期留学をするのか、海外の大学院へ進学をするのか、海外で就職をするのか、それとも日本に残るのか。研究したいことが定まっていない私にとってはまだ何もわからない段階である。しかし、今回のプログラムの参加により、私の選択肢が増えたこと、そして知見が広がったことは確かである。今後は、英語力を向上させるとともに、様々な人との関りを大切にする中で幅広い知識を取り入れ、将来について考えていきたい。</p>	

（２）プログラム内容についての全体的な感想

私は、START プログラムスペインコースに参加したことで、毎日大変貴重な経験ができたと思う。バスク地方の歴史や文化、工業や研究の発展に関する諸講義とバスク語の授業、名所の訪問により、バスク地方への関心が深まった。それに加えて、世の中にはまだ私が知らないことで溢れているのだと改めて実感し、他国の歴史に興味を抱くと同時に、様々な国を訪れてみたいと感じた。

私が今回のプログラムで特に印象に残っているのは、ゲルニカの訪問と、ユネスコのジオパークに指定されている Zumaia の Flysh 層を見たことである。ゲルニカは、（１）において記したように、スペイン戦争が悲惨な事実であることを目の当たりにさせられ、平和に対する考えを改めるきっかけとなった。Zumaia の訪問に関しては、地層を観察する際に乗ったボートも潮風が気持ちよく、非常に楽しいものであったが、それ以上に地層が圧巻であった。水平に堆積するはずの地層が縦向きの縞模様をしているのである。これ程に大きな地層を 90 度押し上げてしまう地球の力を目の当たりにし、大変驚いた。

加えて、バスク地方のダンスと、伝統的なスポーツであるペロタを実際に体験したことも印象深い。ダンスはステップが複雑で、途中から訳がわからなくなっていた。それでも皆と手を繋いで同じ動きをすると、何も考えずいつの間にか楽しい気持ちになっていた。ペロタは、ボールを壁に打ち返すことで戦うスポーツであり、ラケットの様なものを用いるものと、手でそのまま打つものの二種類がある。今回は、手を使う方のペロタを体験したのだが、ラケット競技とはまた違い、手とボールの距離感を図らなければならない難しさがあり、中々思った位置に打ち返すことができなかった。試合も体験し、ほとんど打ち返すことができなかったものの、体を動かし仲間と協力したことで、大きな充実感が残った。

（３）今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

私が今回 START プログラムに参加した中で、重要だと感じたのは何にでも「挑戦」してみることである。私は、英語を話すのが得意ではないうえ、どちらかと言えば前に出るのが苦手な性格である。しかし、このプログラムで一緒になった友人のおかげで、ただ単にプログラムに参加するよりもより様々な体験ができたと考えている。例えば、講義の後に講師の方に質問に行ったこと、現地の方に積極的に助けを求めたこと、ペロタの試合をしたこと、バスク大学が開催していた祭りで謎な競技に参加したことなど様々である。これらにより、自ら英語でコミュニケーションを取る機会を作り出せたり、バスクの地ならではのことが経験できたりした。慣れない地で講義を受け、生活する、というだけで精一杯になってしまうかもしれないが、少し勇気を出して「挑戦」してみると大きな出会いや新たな発見があるかもしれない。私も今後、自ら「挑戦」すること心掛けようと思うし、これから START プログラムに参加する皆さんも渡航先で気になったことがあれば迷わず「挑戦」してみて欲しいと思う。

2024 年度前期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	総合科学部総合科学科 3 年
------------	----------------

（１）START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか

START プログラムに参加し、自分の知っていた、想像していたスペインとは異なるスペインを見て体験することができたと思う。特に、滞在した場所がバスクのサン・セバスチャンということもあり、マドリードやバルセロナなどの有名都市とは異なる文化や歴史をもつ場所なため、予想とは異なる体験をすることができた。自分自身のバックグラウンドからも、「違って当たり前」のスタンスでプログラムに参加はしていたものの、自分のステレオタイプが如何にスペインのごく一部かつ色眼鏡を通したものであることを再認識することができた。今回のプログラムでは、毎日のバスク語の授業を中心に、現地の先生による文学や歴史、技術などの講義を通して、多面的視点からバスクの文化を学ぶことができた。講義だけでなく、イクスカーションも相まって、2 週間という短い期間ではあったが、バスク独自の文化や歴史をただ受動的に聞くだけでなく、実際に訪れて目でみて肌で感じながら学ぶことができた。また、イクスカーションごとで、ガイドして下さった方が訪れる場所ごとで異なっていたことで、さまざまな話を聞くことができただけでなく、地元やその地域にゆかりがある方だからこその話を聞くことができて、講義をして下さった先生方とは異なる視点での話を聞くことができたことに、意義を感じた。

今回のプログラムを通して、実際に訪れてみると予想と異なることがあるだけでなく、訪れてみないと知り得なかったこともたくさんあることを実感した。アメリカやカナダ、メキシコは訪れたことがあるが、今回訪れたスペイン以外のヨーロッパの国々はまだ踏み入れたことがないため、学生のうちに他の国々にも足を運び、自分の知っている各国の文化の特徴やイメージと訪れてから感じることにどのような違いがあるのかを比較してみたいと考えた。これまでも、さまざまなことに挑戦をし、経験をしながら成長をしていきたいと考えていたが、それ以上にコンフォート・ゾーンから抜け出し、これまで以上にさまざまなことに挑戦を続けていきたいとより一層感じた。国外ではもちろん、バスクがスペインの他の地域と大きく異なるように、日本国内においても地域や町独自の特徴があるが、その違いを認識していないことがあると考えるきっかけになった。自分自身が広島出身でないだけでなく、海外在住歴があるからこそ得ることの出来る視点もあると考えるため、もっと視野を広げて生活していきたいと思った。

（２）プログラム内容についての全体的な感想

講義とイクスカーションの組み合わせで、講義で学んだことを実際に訪れて確認することができ、とてもよかった。また、バスクにいるからこそ、バスク語を学ぶことで言語からも文化を学ぶことができてよかったと考える。その一方で、現地学生との交流がほぼ

なかったことは残念に思った。具体的には一緒に講義をうけ、ディスカッションなどを行うことができれば、学生というまた異なる視点から物事を見ることができるほか、たわいのない会話から生まれる発見もあると思うので、そのような機会があればより良いプログラムになると思った。また、毎日行われたバスク語の講義は日本人の先生によるものだったため、一部の学生にとっては分かりやすかったと思うが、英語による講義や現地出身の先生による講義であれば、また異なる印象になったのではないかと考える。バスク語から学べるものがたくさんあった一方で、スペイン語の講義やスペイン文化についても少し講義があると、スペイン一般とバスクの違いがより浮き彫りになり、バスクのユニークさが初めて訪れる人にとってもより分かりやすかったのではないかと思う。全体として、プログラムの内容とスケジュールは、講義などと自由時間の塩梅はよく、とても充実していた。十分に自由時間が設けられていたからこそ、サン・セバスチアンの街から出て、プログラム内で訪れることのない街を訪れることができたため、同じバスクの街ではあったが、異なる雰囲気 of the 街を体験することができた。また、十分な休息時間をも設けられていたため、慣れない土地ではあったものの、大きく体調を崩すことなく、充実した 2 週間を過ごすことができたと思う。

（３）今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

実際に訪れてみないと分からないこと、知り得ないことがたくさんあるため、機会があるのであれば、行って損はないです。見知らぬ土地では、気になったことはコーディネーターを含め現地の人にたくさん質問をすることで、自分の知識を増やすだけでなく、その地の文化や伝統などの理解を深められると思います。自分自身の英語力や現地の言葉を知っているかに関係なく、たわいのない会話から現地の人と話すといいと思います。なので、会話以外にも、決して恥ずかしがらずに、自分自身の好奇心のまま、たくさんの質問をすればいいと思います。１度しか参加することができない START プログラムだからこそ、コンフォート・ゾーンから抜け出し、さまざまなことに挑戦することに、参加する意義が生まれると考えます。